

昔も今も街の憩いの場

公衆浴場

人々は、いつの時代も、公衆浴場に楽しみを求めて、工夫を重ねてきました。今日は、札幌の公衆浴場の始まりから、その変遷をたどっていきま

すが、本来「風呂」とは蒸し風呂のこと、浴槽に湯を満たす「湯」と区別されてきました。最近でも多くの公衆浴場に、「ゆ」と大きく書かれたのれんがかかっています。これは、ほとんどの公衆浴場が「湯」方式であることが理由の一つでしょう。しかし、湯屋と風呂屋は早くから混同されていたため、「風呂屋」という呼び方が今も残っています。

札幌の風呂屋の始まりは、明治三年（一八七〇年）に、小川萬次郎が南一西一に開いた湯屋だといわれます。当時は、市街地に二百戸、周辺の村にも七百戸余りの移住者が開墾に従事するために入地した時期です。こうした人々の求めに応えるように、商家

や宿屋が開業し、風呂屋を開く人も現れたのです。

ただし、風呂屋といっても、最初のものは、ニシン釜と呼ばれる大釜を浴槽に使い、周りを笹などで囲んだ草小屋でした。湯も頻繁には換えられず、あまり衛生的とは言えないものでした。それでも、入浴代わりに創成川や胆振川で水浴びをしていた街の人には大変人気がありました。その後、市街地の拡大とともに、南三西二や東創成町、薄野方面などにも次々と風呂屋が開業しました。

そして、公衆浴場の設備はどんどん近代化していききました。草小屋は板張りの壁やコンクリート敷きの洗い場に、浴槽は木製に変わりました。大正時代には、脱衣所に早くも扇風機を置くところがありました。昭和に入る頃にはタイルが普及し、浴槽に使われたり、壁に富士山などのタイル絵を描いて、華やかな印象を演出することが広まりました。また、洗い場に蛇口が取り付けられるなど、衛生面も向上しました。

また、公衆浴場は、単に入浴するだけでなく、近所の人と文字通り裸の付き合いができる社交場でもありました。子どもにとっては、楽しい遊び場であ



明治初期の南一条通 北海道大学図書館所蔵

り、公共の場のルールを教わる場所としての役割も果たしてきました。

最近では、各家庭に風呂があるのが当たり前となり、昔ながらの公衆浴場の軒数は減っています。その一方で、浴槽に趣向を凝らした施設や、天然温泉の出る公衆浴場が開業して人気を集めています。

こうして形を変えながらも、公衆浴場は、人々の憩いの場として変わらずに親しまれ続けています。

(平成十六年九月号 第九十六回)